

澤田榮介

「前穂高岳東壁遭難報告」 岩稜会 澤田榮介

-前略-

明けて元旦、午前 3 時、満天の星にとび起き、急いで準備にかかる。携行品として、8mm ナイロンザイル 40m1 本。ハンマー 2 個、カラビナ 10 個、アブミ 2 個、捨て縄、ツェルト サブリュック 2 個、ヘッドライト 2 個、マッチ、固形メタ、ローソク、それに個人装備として、各自毛糸セーター 1 着、靴下 2、手袋、食料としてドーナツ 15 個、チョコレート 3 枚、干しぶどう、甘納豆、ピーナッツ、餅菓子、それに大型テルモスに詰めたミルクであった。

パーティは 3 名とし、石原國利、澤田、若山の新人で編成した。6 時になってようやく明るくなったので、見送りの友人と握手し、石原一郎リーダーの激励の言葉を後に天幕を出発した。天候は全くの快晴だが、非常に寒い。零下 25 度だった。全員非常に快調で、腰までもぐるラッセルもなんのその、アタックの喜びに燃えた我々はぐんぐんピッチをあげていく。7 時 10 分、インゼル(島のように出た岩や地面の部分)の中ほどで、折からの御来光を仰ぎ、

その神々しさに全く魂を打たれた。

7 時 30 分、B 沢上部でアンザイレン(ザイルを結び合うこと)をする。オーダーは石原國利、若山、澤田の順である。テルモスのミルクをあけて、チョコレートを齧り、いよいよ高距 150m、傾斜 60 度の北壁に取りつく。8 時、ルートは昨年夏のルート、即ち、一番左側、右岩稜寄りが容易とみられるので、これを採る。先ず、D フェース基部に沿って 1 ピッチ、それから左上方に 1 ピッチと雪の斜面を登り、

次に 4m のクラック(岩壁の割れ目)にハーケンを 1 本きかし、先人のハーケンを利用して乗り越え、チムニー(岩壁に縦に走る割れ目)の基部に入る。雪の状態はまったく悪い。岩の上に乗っている雪は固まることなく、さらさらと落ちてくるので、アイゼンのツアツケ



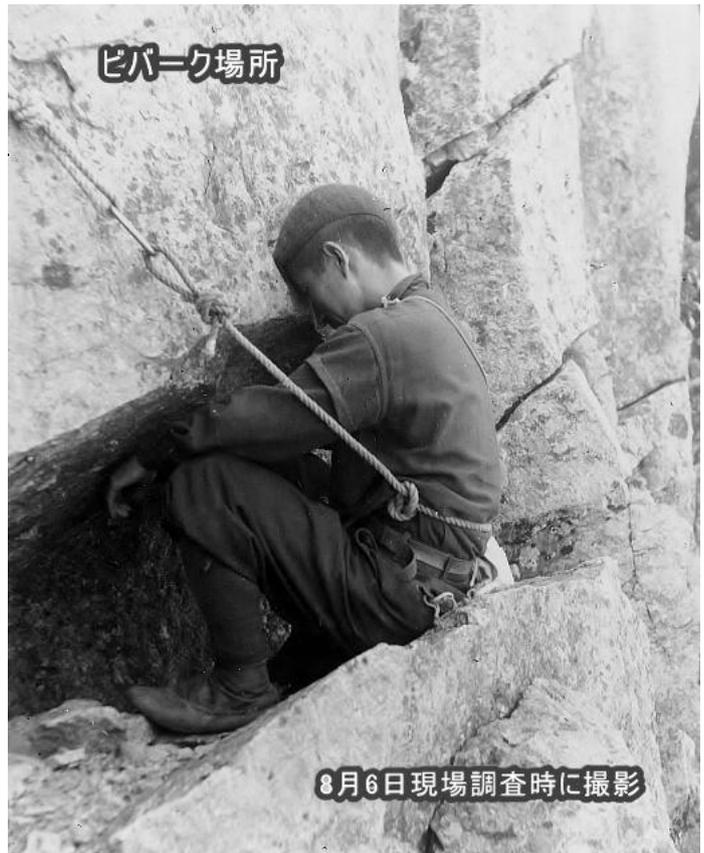
(爪)が全然きかない。トップは全く大変で、雪をかき落として登らなければならず、思わぬ時間の消耗をきたした。約 6m のチムニーに 3 本のハーケンを打ち、やっとのことで、ここを切り抜けて上部の雪のリッジ(山稜)に出る。時間は 11 時、休む間もなく、急傾斜のスノーリッジを 1 ピッチ半を登り、いよいよ難関の第二テラスへ抜ける約 40m の岩壁に向かう。傾斜もぐんぐんと増し、非常に困難に見える。しかしながら、我々の闘志は全然衰えずかえって奮い立つだけであった。トップは左側のチムニーを避け、右側のフェースを微妙なバランスで登り、次に、チムニーに沿って 5m 登ると、行先ははたと止まった。オーバーハング(岩壁の傾斜が垂直以上の部分)である。ハーケンをきかして、ものすごいファイトでこれを越える。非常な悪場である。チムニーの左側へトラバース(傾斜の水平移動)する石原の姿が現れ、大きく左に回り込んで第二テラスの末端の雪の傾斜に再び姿を消した。ここまででザイルの間隔を変え、石原と若山の間を 30m にし、若山をハング下まで登らせる。やがて、ザイルがピンと張り、アラヨ-の声が聞こえる。1 時 50 分、丁度この時第四峰頂上から、大阪市大のパーティーの激励の言葉を受ける。セカンドの若山はどうしてもこのハングが越せないのか、上からの懸命の確保があるにもかかわらず、非常に苦しんでいる。突然、全く突然ザザーッと、左側のチムニーを滑り落ちる雪と共に、上のザイルが物凄く緊張した。どうしたと声をかけたが返事がない。上から驚きの声が聞えて来た。オーバーハングの乗り越しにカツキ、そのままズルズルとチムニーに滑り落ちたらしい。そのままの姿勢でいるように声をかけ、澤田はハング下まで登り、元気づいた若山を元の地点にあげ、肩車でハングを越し、左へ回り込んで第二テラスへ出たのは 14 時 50 分であった。直ちに、ベースキャンプへ向って、ヤッホ-をかけた。第二テラスの急な斜面を 2 ピッチ登り、A フェース下にやっと 15 時 10 分に着いた。

遅い昼食をとり、甘納豆をほおぼりつつ、A フェースを懸命に注視する。A フェースは高距 80m で、傾斜 65 度あり、北壁に比して、積雪が少ない。

この頃から、さしもの快晴もようやく薄もやが立ち込めてきた。天幕に向かってヤッホ-と呼びかけた後、直ちに取りつく。時まさに 3 時半である。右側ルートを忠実に登る。1 ピッチ後、夏には問題でない細かいクラックが非常に悪い。ハーケンを 2 本打ち、アブミ(短めの縄梯子)を使用する。次は傾斜は緩くなるが、スラブ状の岩(凸凹の少ない一枚岩)に不安

定な雪がべったりとついていて、全く感じの悪い所である。足元が今にも崩れ落ちそうな所を慎重に登る。

もう日がとっぷり暮れる。時計を見ると5時半である。頭上30mほどに見える頂上のスカイラインがおいでおいでをして差し招いているようだ。ザックからライトを取り出して、頭上に付けたけれども、やはり視界はきかず全く致命的であった。仕方なくビバークと決心する。しかし、この地点では、体一つ隠すところもないし、それどころか安全な足場一つ探すこともできない。一寸暗澹たる気持ちになる。すると、突然石原が喜びの声をあげた。ピッケルで雪をかきおとしていた時、偶然にも岩のくぼみを発見した。暫く安堵の胸をなでおろし、そこへ集結して、雪



を掘りだし、幅1m20cm、高さ30cm奥行1mの穴を作る。そこへ3人が並んで腰を下ろし、足を投出して穴の中へ入れる。しかし上半身は全然外へ出ており、特に尻が半分しか乗っていないのである。気をゆるめると、今にも真っ逆さまに第二テラスへ落ちて行くような気がする。各自ピッケルで安全なるセルフビレー(自己確保)を行う。18時になって、真黒な空からは粉雪が舞い始め、前途多難を思わしめるが、明日へ希望をつなぎ、ツェルトを冠り、昼食の残りを噛みしめる。身動き一つできない姿勢のためにセーターも着ることができない。アイゼンの紐はこちこちに凍結してしまった。凍傷を心配して、ともすると、緩む心を励まして、懸命に靴の中の指を動かす。寒さは全く厳しい。それでも疲れているためかうとうとしかけるが、やはり眠れない。足はジーンとして感覚が失われてゆく。

今頃、下の天幕ではどうしているだろう。我々の帰りのないのを何と想像しているだろう。ラジュースのうなっている天幕の中で暖かい雑煮で満腹している仲間の顔が目浮かぶ。今

日は元旦なはずだ。

何故、我々はかくもして山へ登らなければならないのだろうか。ただ山の呼ぶ声に夢中になっていて、いいのだろうか。

何時の間にか、左側の若山が安らかな鼾を立て始めた。漸く、落ち着きを覚え再びうとうとする。3時頃であろうか、3人共ぱっちり眼を覚ます。体中一面雪で埋まっている。非常な寒さで、互いに体と体とをぶっつけて暖をとる。固形メタに点火しようとするも、吹き込む風と雪とで、たちまち消えてしまう。火の消えたあとが全くやりきれない。5時、6時と時計の進むのが、アリの歩みよりのろくさい。

漸く明るくなり始めたが、依然雪が止まない。ツェルトから体を乗り出せば、みるみるうちに、ヤッケ共に体がこわばってしまう。暫く暖かくなるのを待って行動を開始することにした。



8時になって、石原が先ずビバーク地点の右側を調べる。そこにはスラブ状の所へ新雪がついて、不安定に見える。それでも、4mほど登ったが、今にも雪が落ちそうで、引き返した。今度は右側のチムニーへ取り付く。約2m上に岩の突起があり、更にその上3mの所に顕著なオーバーハングをなす突起がある。このところを越すのがヤマ場と見られた。ハング下まで

は難なく登り、突起にザイルをかけ、これを手掛かりにして真正面から乗り切ろうとしたが、昨日の疲れのため、どうしても乗り込せない。しばらく休息の後、2度、3度と試みたがやはり駄目だった。そこで、オーダーを変更して、ミッテルの若山が先頭となり石原と交代する。

若山も石原と同様になんなくハング下に至り、突起にザイルをかける。しばらく真正面からのり越そうと試みていたが、だめなのか、今度はザイルを突起にかけたまま、右側岩壁に沿って逃げきろうとして、一步トラバースを開始して、直登にかかろうとした瞬間「アッ」

と一声叫ぶとともに、右足をスリップした。下で懸命に確保していた石原の足に触れて、姿は消えてしまった。不思議にも墜落によるザイルのショックが全然ない。おそるおそるザイルをたぐってみる。これはなんとしたことか、8mm 強力ナイロンザイルがぷつつり切れている。いかにも鋭い刃物で断ち切ったように。「五朗ちゃん、五朗ちゃん」と、第二テラスへ向かって必死になって叫ぶ。9時20分、更に声を張りあげてどなっても応答がない。しばらくは啞然として言葉が出ない。ようやく気を取り直して、天幕へ向って「ヤッホー」を連呼し、救援を依頼する。天幕からは直ちに「了解」という力強い石原リーダーからの応答があり、ついで南川の返事がある。

再びビバークの地点へ腰を下ろす。このまま救援を待つか、来るとすれば早くとも14時半になる。あるいは第二テラスまでアップザイレで降り、若山君を捜し、左側V字状雪渓へ向かってトラバースして逃げるか、あるいは自力でAフェース最後の20mを登り切るか、方法は3通りしかない。しかしながら、疲れ切った身体には、このショックは余りにも痛手だった。登攀の自信を失った我々は救援に来る友を信じ一日でも二日でも待つことに決心した。

雪は休みなく降っている。昨日、声をかけてくれた大阪市大のパーティも、この雪では前穂高岳の頂上へは登れないだろう。

しばらくツェルトを被っているうちに、漸く身体も休まった。すると第二テラスへどうしても下らなければならないという考えが強力に支配し始める。

アップザイレンの準備にとりかかる。まず、石原が下り始めたが、第二尾根近くで、救援隊らしい声がしたので留まった。ヤッホーをかける。突然、高井兄の音が間近に聞こえた。「元気か」「ザイルが切れて五郎ちゃんが落ちたんだ」「落下地点は」「わからん」「現在の位置は」

「頂上直下 20m」「解った。動かないでいてくれ」こんな言葉が交わされた後、アップザイレンをやめ、もとの地点へ腰を下ろす。14 時半である。

A 沢から地上に至る所用時間を計算し、二人で話し合った。急に空腹を覚え始めた。食物らしいものは昨日の昼食をしたきりだったのでやむを得ない。と言っても何物もなく、ザックをひっくり返して、漸く甘納豆を五つ六つ発見して、二人で分け合って食べる。食欲は益々盛んとなる。恨みのオレンジ着色のナイロンザイルがミカンに見えて、空腹をかりたてる。そんな事を思いながらも時間は刻々と経っていく。16 時半になっても、救援隊の来る気配もない。不安な気持ちが湧き始めた。しかし、石原リーダー、高井兄、それに東壁の大先輩上岡さんも天幕に居られるはずだ。絶対来てくれる。こう確信してからも、互いに見合わず眼と眼、顔には力がない。17 時半、日も暮れはてて、再び飢えと寒気にさいなまれる長い夜を迎えなければならなかった。



三人から二人に減ったので、いくぶん楽に座れるようになったものの、体の疲れは覆い隠すことは出来ない。天幕に向かって叫ぶ声も枯れて声とならない。これぐらいで参ってたまえるものか。ナンガパルバットで逝ったメルクルを見よ。明日こそは頑張ると、互いに励まし合う。コブ尾根、北尾根、滝谷と合宿の思い出はつきない。楽しかったその時々思い出が、走馬燈の如く次から次へと出てくる。こんなことを覚めるともなく、眠るともなく想い続ける。はっとして目が覚めて眺めると、第4峰は正面ルートをスカイラインに黒々と厳然と聳えている。いつまでも山々は我々を守っていてくれるだろう。段々と睡魔が襲ってくる。このまま眠ってしまおう。彼らの懐に抱かれつつ何時の間にか眠ってしまった。

午前4時頃か、厳しい寒さに夢が破れた。とても耐えられない寒気だ。蠟燭を点けようとしても風に吹き消されてダメである。この時の衣類は、澤田は、目出帽・毛莫大小肌着2枚・毛カッター1枚・毛ズボン下1枚・毛ニッカー1枚・ストッキング1枚・靴下太毛糸2枚・毛糸手袋1枚・毛皮手袋1枚・ウインドヤッケ上下で、石原は毛莫大小肌着・毛カッター・セーター・毛ズボン下・ニッカー・ストッキング・太毛糸靴下2枚・毛糸手袋2枚・ウインドヤッケ上下、そして帽子を失った代わりとして、襟巻を冠っている。

遭難を報道する新聞



1月3日付 中日新聞



1月4日付 朝日新聞

クリックしてください
大きくなってお読みいただけます

現在と違い、通信手段の電話に雑音が入り、線質も悪く聞き取りにくかったので、細かい部分で間違が多いのは致し方ない、



一月五日付 伊勢新聞

雪は依然として、しんしんと降っているが、風が比較的少ないのが何よりありがたい。

足の感覚が全然失っている。そういえば、昨夜は全然足のことを考えもしなかった。やはり、アイゼンの紐の固さが原因となつたのであろうか。書物で見たアンナプルナのエルゾーグ隊長の足が眼前にちらつく。

やっと長い長い夜が明けた。陽があたり始める。ツェルトを脱いで天幕へ向かって叫ぶ。声が枯れると口笛を吹く。天候は回復しつつある。1時間置きにヤッホーをかける事にする。9時、今一度昨日のチムニーに取りつく。やはり駄目だ。これしきのハングぐらいなんだと、負け惜しみを言いながらツェルトを被る。

10時20分、ヤッホーをかけようと上部の丘の地点を見るとラッセルの跡がくっきりと見える。更にその跡をたどると、黒点が四つ上に向かって動いて来るのが見える。嬉しさの余り、ヤッホー

を連発する。さあ引き揚げの準備だ。もうじっとしてはいられない。リュックを背負って

ようとしても、どうする事も出来ない。互いに苦笑しながら再びツェルトを取り出す。今度こそ 15 時までには、来るだろう。突然頭上からヤッホーがかかる。「ここだ。ここだ。」と合図する。

しばらく待つ。するすると高井兄の見事なアップザイレンが現れる。「よう頑張った…」感激に何も言葉が出ない。持って来てくれた暖かいミルクを飲んで少し元気が出てきた。引き揚げの準備にかかる。二日間のオカン場となったこのテラスに感謝を捧げ、はるか下の第二テラスへ向って合掌する。「友よ、安らかに眠れ」と別れを告げる。

まず石原が頂上からのザイルに身体を結び、登り始める。ルートは左側スラブ状の方だ。14 時 40 分、続いて澤田が登る。腕の力が全然ないので、上からの力強い引き揚げに頼るより仕方がない。頂上には上岡さん始め、早大 OB、関西登高会、西糸屋の方々の暖かい手に迎えられた。やがて A 沢を経て、17 時 10 分、無事ベースキャンプへ達した。

もう空は暗くなりかけて、星がちかちか光を増していた。

三重県山岳連盟報告

第 六 号



1954

出来て、喜びに胸をふくらませて鹿嶋の谷へ下って来たのであったが、宿に着いて、北屋根から大島氏が墜落して行方不明になったと言うニュースを新聞紙で読んで、今度の様に愕然としたのである。

山を愛し、高い山の友かでの生涯を築くものは、その代償として、死が早く到来することは避けられないものであろうか。

若山君は兄さんの石岡さんの感化を受けて、津島高校時代から登山を始めた。その登山方法はきびしいもので、安易な登山は真の登山家のとらぬものとして、困難なものから、困難なものへと進んでいった。併しこれは青年の客気に依って行い無謀なものではなく、順序をおって行っていた。本格的な岩登りを始めて未だ二三年にならぬのに、彼の緻密な頭脳と、勇敢な精神によって、その技術の上達には、誰れも舌を巻く程であった。

併し、彼れはこれを誇る様子はなく、常に謙譲であった。又、内には熱烈な山への情熱を燃し乍ら、これを口に出して言うことなく、いつも冷静であった。

彼れは非常に調和的で、彼の居るキヤンプは常に春の如く陽気で、笑い声が満ちていた。誰れからも「五郎ちゃん」の愛称で、好かれていた。

彼れは、登山を離れても、実に純真な良い青年であった。かくも早く山のお召しに遇わなかったならば、きっと、立派な登山家と友ったであろうし、又、社会人としても定めし立派な人となつたであろう。なんと言つても、彼れを失つたことは、かえすがえすも残念なことである。

併し、我々の嘆きはヒモかくとして、彼れを掌中の玉の如く、愛していられた御両親の御悲歎は誠に生命を削る想いであったであろう。我々はこの深き御歎きを御慰めすることは、とうてい出来ないが、彼れの遺体を、氷雪に埋れた谷向から、御両親の御膝元へ、一日も早く帰すことが、せめてもの御慰めとなるであろう。

我々は唯だ、唯だ彼れの冥福を祈ると共に、彼の貴い死の犠牲によって知らされたナイロンザイルの性質をよく把握して、今後の登山をより一段と安全なものとしなければならぬ。

私は惜しみて余りある、彼の死に接して、深く哀悼の意を表し、この拙文を書いた次第である。

前穂高岳東壁遭難報告書

岩 稜 会 沢 田 栄 介

厳冬期の奥又白谷生活、特に北尾根才四峯バットレスから前穂高岳東壁に連る雪と岩との殿堂こそ、我々山男にとって、かぎりない魅力であろう。

過去、幾度かの諸先輩の愚命の努力にもかかわらず、厳冬期には頑としてその壁里に入るを許さない才四峯正面ルート、或は幾多の尊い犠牲を払つても、なおかつ、その完登を許さない前穂高岳東壁。これこそ常に脳裏に焼きついて忘れることの出来ない処である。

ここに我々は熱烈なる闘志をたぎらせて、敢然と挑戦したのであるが、遭難という全く不面目な事態を惹き起し、爲に、各山岳会の皆様は、大友な御心配と、御迷惑とおかけしたことは誠に相済みぬことと、深くお詫び申上げる次第であるが、此事が今後、山岳界へ少しでも役に立てば幸甚であると思ひ、罪尤をも省みず、筆をとつた次第である。

昭和29年12月22日、先発隊として、石原弟、沢田、南川、若山の四名は勇躍して、上高地へ向つた。明神池養魚場を経て、丈余の積雪を踏みわけ、又白池室の木附近へベースキヤンプを設営し、荷揚げを終えたのは29日であった。此の間、リーダー石原兄の参加をみ、いよいよ好天気を待っての体勢は整つたのである。石原兄弟、沢田は偵察とラッセルを兼ねて日次上部まで行く。ここから眺めた東壁下部、即ち、北壁と称する部分は雪も沢山つき、一見したところ、登攀は容易であるとの印象を得たので、一同満足な気持ちで天幕へひきがえした。31日は泣き出しせうな空から雪が舞ひ下つていた。午後、高井兄弟が参加した。いよいよ29年も終りである。

明け方元旦、午前3時、満天の星にともひつき、急いで準備にかかる。携行品として、八種ナイロンザイル40米一本、ハンマー2個、カラビナ10個、アズミ2個、捨縄、ツエルトサブザック2個、ヘッドライト2個、マッチ固型メタ、ローソク、それに個人装備として各自、毛糸セーター1着、靴下2、手袋3、食糧としてドーナツ15個、チョコレート3枚、干葡萄、甘納豆、ピーナツ、餅菓子、それに大型テルモスにつめたミルクであった。

パーティは三名とし、石原弟、沢田、若山の新人で編成した。六時になつてようやく明るくなったので、見送りの友人と握手し、石原リーダーの激励

の言葉を後に天幕を出発した。

天候は全くの快晴だが、非常に寒い。零下二十五度だった。全員非常に快調で、腰までもぐるラッセルもなんのその。アタックの喜びに燃えを我々はぐんぐんピッチをあげていく。七時十分、インセルの中程で、折からの御来光を仰ぎ、その神々しさに全く魂をうたれた。

7時30分、沢上部でアンサイレンをする。オーダーは石原、若山、沢田の順である。テルモスのミルクをあけて、チョコレートを噛り、いよいよ高距150米、傾斜60°の北壁に取りつく。8時、ルートは昨年夏のルート、即ち、一番左側、右岩後寄り容易とみられるので、これを採る。先ず、Dフェース基部に沿って一ピッチ、それから左上方に一ピッチと雪の斜面を登り、次に4米のクラックにハーケン一本をかし、先人のハーケンを利用して乗り越え、チムニーの基部に入る。雪の状態は全く悪い。岩の上に乗っている雪は固まることなく、さらさらと落ちてくるので、アイゼンのツアツケが全然きかない。トッフは全く大変で、雪をかき落して登らなければならず、思わぬ時間の消耗をきたした。約6米のチムニーに一本のハーケンを打ち、やっとのこじで、こじを切り抜けて上部の雪のリッジに出る。時間は11時、休み間もなく、急傾斜のスノーリッジを一ピッチ半を登り、いよいよ難関のオ2テラスへ抜ける約40米の岩壁に向う。傾斜もぐんぐんと増し、非常に困難に見える。しかしながら、我々の闘志は全然おとろえず、かえって奮いたっただけであった。トッフは左側のチムニーをさけ、右側のフェースを微妙なバランスで登り、次に、チムニーに沿って五米登ると、行先ははたと止った。オーバーハングである。ハーケンをきかして、物凄のファイトでこれを越える。非常に悪場である。チムニーの左側へトラバースする石原の姿が現れ、大きく左に廻り込んでオ2テラスの末端の雪の斜面に再び姿を消した。此処でザイルの间隔を獲え、石原と若山の向を30米にし、若山をハング下まで登らせる。やがて、ザイルがピンと張り、アラヨーの音が聞える。1時50分、丁度、この時オ4峰頂上から、大阪市大のパーティーの激励の言葉を受ける。セカンドの若山はどうしても此のハングが越せないのか、上からの懸命の確保があるにもかゝらず、非常に苦しんでいる。突然全く、突然サザーと、左側のチムニーを滑り落ちる雪と共に、上のザイルが物凄く緊張した。どうしたと声をかけたが返事がない。上から驚きの声が聞えて来た。オーバーハングの乗り越えに力つき、そのままズルズルとチムニーに滑り落ちたらしい。そのままの姿勢でいるように声をかけ、沢田はハング下まで登り、元気づいた若山を元の地点にあげ、肩車でハングを越し、左

へ廻り込んでオ2テラスへ出たのは14時50分であった。直ちに、ベースキャンプへ向って、マッホーをかけた。オ2テラスの急な斜面を2ピッチ登り、Aフェース下にやっと15時10分についた。

遅い昼食をとり、甘納豆をほぼりつつ、Aフェースを懸命に注視する。Aフェースは高距約80米で、傾斜65度あり、北壁に比して、積雪が少ない。

此の頃から、さしもの快晴もようやく薄もやがたちこめて来た。天幕に向ってマッホーと呼びかけた後、直ちにとりつく。時まさには3時半である。右側ルートを忠実に登る。1ピッチ後、夏には問題のない細いクラックが非常に悪い。ハーケンを2本打ち、アブミを使用する。沢は傾斜は緩くなるが、スラスラ状の岩に不安定な雪がべっとりついていて、全く感じの悪い所である。足元が今にもくずれ落ちそうなる所を慎重に登る。

もう日がとっぷり暮れる。時計を見ると5時半である。頭上30米程に見える頂上のスカイラインがおいておいてを差招いているようだ。ザックからライトをとり出して、頭上につけたけれども、矢張り視界はきかず全く致命的であった。仕方なくビバークと決心する。併し、此の地点では、身体一つかくすところもないし、それどころか安全な足場一つ探すことも出来ない。一寸暗然たる気持になる。すると、突然、石原が喜びの声をあげた。ピッケルで雪をかき落していた時、偶然にも岩のくぼみを発見した。漸く安堵の胸をなでおろし、そこへ集結して、雪を掘り出し、巾1米20、高さ0.5米奥行き1米の穴を作る。そこへ三人が並んで腰を下し、足を投出して穴の中へ入れる。併し上半身は全然外へ出ており、特に尻が半分しか乗っていないのである。気をゆるめると、今にも真逆さまにオ2テラスへ落ちてゆく様友気がする。各自ピッケルで完全なるセルフビレイを行う。18時になって、真黒な空からは粉雪が舞い始め、前途多難を思わしめるが、明日へ希望つなぎ、ツェルトを冠り、昼食の残りを噛みしめる。身動き一つ出来ない姿勢のためにセーターも着る事が出来ない。アイゼンの紐はこちこちに凍結してしまった。凍傷を心配して、ともすると、ゆるむ心をはげまして、懸命に靴の中の指を動かす。寒さは全く厳しい。それでも疲れているためかうとうとしがけるが、矢張り眠れない。足はじーんとして感覚が失われてゆく。

今頃、下の天幕ではどうしているだろう。我々の帰りの無いのを何と想像しているだろう。ラヂューズのうなっている天幕の中で暖い雑煮を満腹して居る仲間の顔が目に見える。今日は元旦な筈だ。

何故、我々はかくもして山へ登らなければならぬのだろうか。唯だ山の呼ぶ声に夢中になって良いのだろうか。

何時の間にか、左側の若山がやすらかな躰をたて始めた。漸く、落着きを覚え再びうとうとする。三時頃であろうか、三人共ぱちり目を覚す。体中一面雪で埋っている。非常な寒さだ。互に身体と身体とをぶっつけて暖をとる。固型メタに点火しようとするも、吹き込む風と雪とでたちまち消えてしまふ。火の消えた後が全くやりきれない。5時6時と時計の進むのが、蟻の歩みよりのろくさい。

漸く明るくなり始めたが、依然雪が止まない。ツェルトから体を乗り出せば、みるみる中に、マツケ共に体がこわばってしまう。暫く、暖くなるのを待つて行動を開始することにした。

8時になって、石原が先ずビバーク地点の左側を調べる。そこはスラブ状の所へ新雪が附いて、全く不気味な程不安定に見える。それでも、4米程登ったが、今にも雪が落ちそうで、引返した。今度は右側のナムニーへ取付く。約2米上に岩の突起があり、更に、その上3米の所に顕著なオーバーハンクをなす突起がある。此処を越すのがママ場と見られた。ハンク下までは難なく登り、突起にザイルをかけ、これを手がかりにして真正面から乗り切ろうとしたが、昨日の疲れのため、どうしても乗り越えない。暫く休憩の後、二度、三度と試みたが矢張り駄目だった。そこで、オーダーを変更して、ミツテルの若山が先頭となり石原と交代する。

若山も石原と同様になんなくハンク下に至り、突起にザイルをかける。暫く真正面から乗り越えようと試みていたが、駄目なのが、今度はザイルを突起にかけたまま、右側岩壁に沿って逃げ切ろうとして、一步トラバースを開始して、直登にかかろうとした瞬間、「アッ」と一声叫ぶと共に、右足をスリッパした。下で懸命に確保して居た石原の足に触れて、聲は消えてしまった。不思議にも墜落によるザイルのショックが全然ない。おそるおそるザイルをたぐってみる。これはなんとしたことか、8打強力ナイロンザイルがぶっつり切れている。恰も鋭い刃物でたち切ったように。「五郎ちゃん、五郎ちゃん。」とオ2テラスへ向って必死になって叫ぶ。9時20分、更に声を張りあげてどなっても応答がない。暫くは呆然として言葉が出ない。ようやく気をとりなおして、天幕へ向って「マッホー」を連呼し、救援を依頼する。天幕からは直ちに「了解」という力強い石原リーダーからの応答があり、ついで単川の返事がある。

再びビバークの地点へ腰を下す。このまま救援を待つが、来るとすれば早くとも14時半になる。或いはオ2テラスまでアップザイレンで下り、若山君を援し、左側V字状雪渓へ向ってトラバースして逃げるか、或いは自力で

Aフェース最後の20米を登り切るが、方法は三通りしかない。併し、昨ら、疲れ切った身体には、このショックは余りにも痛手だった。登攀の自信を失った我々は救援に来る友を信じ一日でも二日でも待つことに決心した。

雪は休みなく降っている。昨日声をかけてくれた大阪市大のパーティもこの雪では前穂高岳の頂上へは登れないだろう。

暫くツェルトをかぶっている内に、漸く身体も休まった。するとオ2テラスへどうしても下らなければならぬという考えが強力に支配し始める。

アップザイレンの準備にとりかゝる。先ず、石原が下り始めたが、オ2尾根近くで、救援隊らしい声がしたので留った。マッホーをかける。突然、高井兄の声が同近かに聞えた。「元気か」、「ザイルが切れて五郎ちゃんが落ちたんだ」、「落下地点は」、「わからん」、「現在の位置は」、「頂上直下20米」、「解った、動かないでいてくれ」こんな言葉がかわされた後、アップザイレンをやめ、もとの地点へ腰を下す。14時半である。

A沢から頂上に至る所要時間を幾度も幾度も計算し、二人で話し合った。急に空腹を覚え始めた。食物らしいものは昨日の昼食をしたきりだったので止むを得ない。と言っても何物もなく、ザックをひっくり返して、漸く甘納豆を五つ六つ発見して、二人で分けて食べる。食慾は益々盛んとなる。根みのオレンジ着色のナイロンザイルが密柑に見える。空腹をかり立てる。そんな事を思い乍らも時向は刻々と経っていく。16時半になっても、救援隊の来る気配もない。不安な気持が湧き始めた。併し、石原リーダー、高井兄、それに東壁の大先輩上岡さんも天幕に居られる筈だ。絶対来てくれる。こう確信してからも、互に見合す眼と眼、顔には力がない。5時半、日も暮れはてて、再び飢えと寒気にさいなまされる長い夜を迎えなければならなかった。

三人から二人に減ったので、幾分楽に座れるようになったものの、体の疲れは覆い隠すことは出来ない。天幕に向って叫ぶ声も枯れて声とにならない。これぐらいで参ってたまるものが、ナンガバルバットで遊んだメルクルを見よ。明日こそはがん張ると、互に励ましあう。コフ尾根、北尾根、滝谷と合宿の想出はつきない。楽しかったその時々々の想出が、走馬燈の如く次から次へと出てくる。こんなことを覚めるともなく、眠るともなく想い絶ける。はあっとして目が覚めて眺めると、オ4峰は正面ルートをスカイラインに黒々と厳然と聳えて居る。何時までも山は我々を守って居てくれるだろう。段々と睡魔がおそってくる。此のまま、睡ってしまおう。彼等の懐に抱れつゝ何時かねむってしまった。

午前4時頃か、厳しい寒さに夢が破れた。とても堪えられない寒気だ。蟻

燭をつけようとしても風は吹き消されて駄目である。此の時の二人の衣類は沢田は、目出帽、毛莫大小襦袢2枚、毛カッター1枚、毛スボン下1枚、毛ニッカー1枚、ストッキング1枚、靴下太毛糸2枚、毛糸手袋1枚、毛皮手袋1枚、ウインドヤッケ上下で、石原は毛莫大小襦袢毛カッター、セーター毛スボン下、ニッカー、ストッキング、太毛糸靴下2枚、毛糸手袋2枚、ウインドヤッケ上下、それに帽子を失った代りとして、襟巻をかぶっている。

雪は依然として、しんしんと降っているが、風が比較的少ないのが何よりありがたい。

足の感覚が全然失っている。そう言えば、昨夜は全然足の車を走らせもしなかった。矢張り、アイゼンの紐の固さが原因となったのであろうか。書物で見たアンナフルナのエルゾーグ隊長の足が眼先にちらつく。

やっと長い長い夜が明けた。陽があたり始める。ツェルトをぬいで天幕へ向って叫ぶ。声が枯れると笛を吹く。天候は恢復しつつある。一時間おきにマッホーをかける事にする。9時、今一度昨日のチムニーに取りつく。矢張り駄目だ。これしきのハンクぐらいなんだと負けおじみを言い乍らシェルトをかぶる。

10時20分、マッホーをかけようと上部の丘の地点をラッセルの跡がくっきりと見える。更にその跡をたどると、黒点が回つ上に向って動いてくのが見える。嬉しさの余り、マッホーを連発する。さあ引揚げの準備だ。もうじっとしてられない。ルックを背負ってしようとしても、どうすることも出来ない。互に苦笑しながら再びツェルトを取り出す。今度こそ時までは来るだろう。突然頭上からマッホーがかかる。「ここだ。ここだ」と合図する。

暫く待つ。するすると高井兄の見事なアップサイレンが現れる。「よう頑張った……」感激に何も言葉が出ない。持って来てくれた暖いミルクを飲んで少し元気が出て来た。引揚げの準備にかかる。二日間のオカン場となったこのテラスに感謝を捧げ、はるか下のオ2テラスへ帰って合掌する。「友よ、寂らかに眠れ」と別れを告げる。

先ず石原が頂上からのザイルに身を結び、登り始める。ルートは左側スラブ状の方だ。14時40分、続いて沢田が登る。腕の力が全然ないので、上からの力強い引揚げに頼るより仕方がない。頂上には上岡さん始め、早大OB、奥西登高会、西糸屋の方々の暖い手に迎えられた。やがてA沢を経て、17時10分、無事ベースキャンプへ達した。

もう空は暗くなりかけて、星がちかちか光りを増していた。

